

氏名（本籍）	オオカワラ 大河原	ハリ 典子	コ （東京都）
学位の種類	博士（文化財）		
学位記番号	博美第132号		
学位授与年月日	平成16年3月25日		
学位論文等題目	作品 薬師寺吉祥天画像、現状模写、復元模写 論文 『薬師寺吉祥天画像に関する研究』 - 奈良時代の麻布画 -		
論文等審査委員			
（主査）	東京芸術大学	教授（美術学部）	宮廻正明
（論文第1副査）	”	助教授（ ” ）	桐野文良
（作品第1副査）	”	教授（ ” ）	田淵俊夫
（副査）	”	助教授（ ” ）	木島隆康

（論文内容の要旨）

【研究目的】

本研究の対象作品である薬師寺所蔵国宝「吉祥天画像」は、奈良時代に描かれた額装の麻布画である。本画像の大きな特色である麻布を基底材として使う古典絵画は奈良時代に見られるが、その現存作例は非常に少ない。特に濃彩の絵画は僅かにこの薬師寺吉祥天画像とボストン美術館所蔵の釈迦霊鷲山説法図があるにすぎない。正倉院や法隆寺にも様々な麻布や麻布に描かれた淡彩画が残っているが、平安時代以降は絵画の基底材として麻布の使用例は見られなくなる。

数少ないが麻布画の中でも特に優れた作例である本画像について、従来から技法や色彩に関する様々な研究がされてきたが、その多くが推測によっており、実際に麻布に描く技法やその色彩について明確にした研究はほとんど見られない。

そこで本研究では、実体験に基づく本画像の技法と色彩の検証を行うことを目的とし、本画像の現状模写を行い、現在の状態を正確に把握した上で、復元模写を制作する。さらに、麻布との技法の比較対象として絹布を基底材とした復元模写を制作し、麻布と絹布の技法上、表現上の比較を行う。このように、本画像が麻布上にどのような技法で描かれたのかを明らかにし、麻布画についての正確な理解を深める必要があると考える。

【研究手順】

原本の熟覧や昭和32年の修理報告書を前提として、原本の基底材に近い繊維状態と織密度を持つ麻布を用い現状模写を行った。

技法や色彩の基礎検証として、響水の実験、麻布の劣化実験を行った。また絵具の接着剤である膠と荏油の撥水性の比較、蜜蝋の表面塗膜の実験、燈明の煙による黒化試験を行った。

復元模写を行うために、現状から読み取れる限りの当初の線描を描きおこした。欠損部分には、他の類似した作品や修理の際に撮影された赤外線写真、現在の赤外線CCDカメラによる調査を参考

にしながら、美術史の観点から様式、表現において客観性の高い復元の線描を描き加えた。彩色に関しては、目視の観察及び修理の際に撮影されたX線写真、赤外線写真を参考にしながら、色料を選択した。さらに蛍光X線による調査によって色料の元素を特定し、色を推定して、色料候補の退色実験を行った。こうして得られた資料を基に復元模写の制作を行った。

【総括】

以上のような研究により、色彩については、目視での詳細な調査に加え、科学分析調査を行ったことで、今までにない正確な資料を得られた。従来本画像の下地絵具は白土と考えられていたが、鉛白が使われていることが判明した。また赤と緑の2色の縹網彩色を基調とすると認識されていたが、実際は紺丹緑紫の4色の縹網彩色がなされ、正倉院宝物の鮮烈な色彩にまさるとも劣らない、華麗な彩色が施されていることが確認された。

使用されている絵具の種類はそれほど多くはなく、群青、緑青、辰砂、弁柄、鉛白、金といった現在伝わる基本的な日本画絵具によって彩色され、それに加えて、墨、臙脂、藍などの豊富な染料系絵具が色彩の幅を広げていたと考えられる。

基底材の麻布は1cm四方の織密度が経緯23~24本の細かいもので、当時細布と呼ばれていた上級の麻布であると考えられる。これに描画するためには、にじみ止めとして礬水を引く必要があると判断した。また、色料から銅成分が検出された付近の麻布の欠損が非常に多く、実験の結果から、植物繊維の麻布が緑青で劣化することがわかった。

技法に関しては、いままで油絵、蜜陀絵説、表面に蜜蠟塗膜の存在等が指摘されていたが、これは実際に復元模写を制作してみると、不自然に思われる。絵具の発色や撥水性について実験し考察した結果、膠だけで描かれたと考えるのが最も妥当である。8世紀後半にこれだけの作品が作られていることから、日本ではかなり早い時期から膠で描く技法が発達していたと考えられる。

実制作はまず現状模写を行い、次に復元模写を制作した。現状模写によって、本画像を細部に渡って把握することができ、植物で作られた布である麻布独特の性質も感じとることができた。

復元模写の制作によって、技法と色彩に関して実技に根ざした理解を深めることができた。例として、画中に存在する細く薄い朱線が、彩色のための下描線であることが、実際に鉛白下地の上に彩色することで初めて実証できた。また、淡紅色を作るのに鉛白・丹・臙脂を混ぜることや、紫色を得るために群青に臙脂の重ね塗りを行うなど、混色や重色によってさまざまな色調を出していることが確認できた。原色を縹網彩色にして用いることで、非常に美しい調和を生み出せることも検証できた。

本研究のように美術史、科学分析の観点から検討を重ねた上で、復元模写を行うことにより、初めて1200年前に描かれた当初の鮮やかな色料を調和させていた美意識を具現化することができた。

最後に麻布から絹布への変遷について述べる。大陸でも麻布は使用されているが、その織りは時代を問わず粗く、日本の麻布の持つ質感とは異なり、描かれている絵画も色数が少なくおろかである。そこで本研究では、日本と大陸の麻布画は切り離して考えたい。

正倉院宝物中には麻布を使ってあるものが多くある。それは着物や下着から始まり、工芸品、装飾品、地図、袋、敷物、芯材など実に多岐にわたっている。その使用頻度から見る限り、奈良時代に麻布は重要な素材であったことが推察できる。それゆえ、本画像が麻上に描かれたことは

当時としては特別変わったことではなかったと思われる。当時篤い信仰を集めていた吉祥天像を描くために細かい織りの麻布が用意されたのであろう。

そこで麻布から絹布へ変遷した原因について考えると、麻布と絹布に同じ絵具を用いて描いてみたことで判ったが、麻布は表からのみ彩色していくが、絹は表裏両面から彩色が可能であるため、重色を多用して微妙な色調を表現することができる。また絹布は表面が平滑であるために、細かい装飾の描き込みが容易であり、切金の細工にも適していることが判った。

次に表具の形態から考えると、麻布のように表から厚く彩色してあるものでは剥落が起きてしまうと思われる。絹布は裏彩色が裏打ちによって保護され、薄くて柔らかく、より軸装に適していたと考えられる。

このように美術史、科学分析、実制作に基づく観点から、当初の色彩を推定し画像を描いて具体化する吉祥天画像の研究は今回初めて行われたものであり、本研究によって、薬師寺所蔵国宝「吉祥天画像」の麻布素材についての理解を深めるとともに、色彩、技法を明らかにすることができた。これは伝統的な日本絵画の研究をさまざまな角度から行っている総合芸術大学である東京芸術大学であるからこそ成しえた成果である。本研究が古典絵画の素材、色彩、技法に関する理解の一助となり、初期の日本絵画に対する解明がより進むことを期待する。